

## 移りゆく

## ベドウィンの暮らし

**荒野の民** アラビア語を話す遊牧民を、一般に「ベドウィン」と呼ぶ。これは「荒野の民」を意味するアラビア語のバドウから来ており、中

東全域の砂漠や山岳地帯に彼らは暮らしている。事実はどうあれ、ベドウィンはアラビア半島を故郷の土地と考え、征服者の子孫を自負し、ほとんど例外なくイスラームを信仰している。

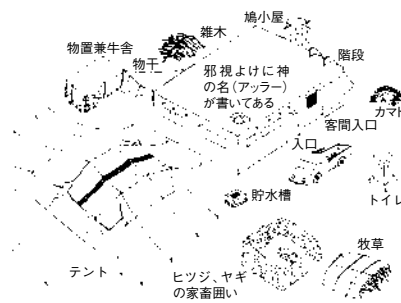
**遊牧生活** 遊牧は農耕牧畜の開始（中東では今から1万年ほど前）以降に発達した生業形態であり、天幕に住み、家畜を移動させて広範囲の水場と牧草を利用することで成立した。ベドウィンのテントは方形であり、ユーラシア大陸東半の円筒形や円錐形のテントと異なる。水や牧草など資源の分配には、部族的紐帯が有効に機能していた。

家畜はヒツジが主であり、これにヤギを加える。ラクダは荷駄の運搬や長距離の移動に用い、ウマは高速の移動、とくに戦闘に用いられた。経済的な重要性では何よりもヒツジが優るが、ベドウィンの名誉や誇りと結びついて大切にされたのはラクダとウマである。

家畜から得られる毛はテントの材料に、革はさまざまな容器に、乳と肉は食料に利用された（ウマはイスラーム法により食用にならない）。しかし、米や小麦などの食料、衣服、武器道具類はいずれも定住民から入手しなくてはならず、この意味では、ベドウィンは農耕地帯の周辺で定住民に依存する存在であった。

**軍事力** ベドウィンが歴史に果たした役割で特筆すべきは、その機動性と部族の連帯を生かした軍事力であり、イスラーム勃興期の征服活動では、それがおおいに発揮された。後代においても、諸王朝は遊牧民を頼りにし、またその反抗にはおおいに手を焼かされた。

ただし、軍事力の点で、ベドウィンはトルコ・モンゴル系の遊牧民にはかなわなかった。世襲的な首長制の伝統を有さないベドウィンの組織形態は強固な凝集力を発揮せず、たやすく離合集散をくりかえし、中東諸王朝の興隆史において目立つのはやがて、ベドウィンよりもトルコ系の遊牧民集団になっていく。



現在のベドウィンの住まい 夏は定住家屋とテントが併用される。(©佐藤浩司編『住まいをいつむく』学芸出版社(作成 赤堀))

**定住化** 19世紀になると、急速にベドウィンの定住化が進行する。高まってゆく植民地化と近代化の圧力は、徴税と徴兵、学校教育といった点で不都

合な、遊牧の暮らしを許容しなかった。この事情は、植民地からの独立以後も変わることはなく、ベドウィンの伝統的な暮らしはますます実践しがたいものとなっていった。元々ベドウィンは少数派であったが、現在では、最大の遊牧民人口を擁するサウジアラビアでも、その割合は総人口の10%程度、中東全域では1%未満といわれている。

テントは婚礼や葬儀などの儀礼の空間となり、平屋の定住家屋が砂漠に建てられて、ベドウィンたちは農耕や賃金労働に従事するようになっていった。その過程で困窮し、都市へと流れていく者も多い。

もちろん、定住化が進捗するなか、ベドウィンはひたすら被害者として流されてきたわけではない。いち早く新しい時代への適応をめざし、実際にも運送業や観光業などで経済的に成功した者もあり、そのしたたかさは一筋縄ではない。かたくななまでに遊牧に固執する人々もいるが、北方のトナカイ遊牧に見られるような、遊牧自体を近代化する試みは今のところ乏しい。

遊牧の暮らしを捨てた現代のベドウィンに共通するのは、むしろ部族としての血統のつながりである。学校教育の普及や識字率の上昇にともなって、この点についても意識の変化は見られるが、連綿と伝えられてきた血統の論理は今もなお、選挙や事業の立ち上げにあたって、同族を動員する有効な論理として機能し続けている。現代のアラビア語の辞書がバドウを「遊牧民」ではなく、「部族民」として定義しているのはこの表れである。(上智大学助教授 赤堀雅幸)